

もう 1 人の迷亭

——小林郁宛漱石書簡から——

福岡女学院大学名誉教授(日本近代文学) 原 武 哲

1. 『吾輩は猫である』迷亭のモデル小林郁の帰国

1920(大正9)年4月某日、上体は恰幅がいいが腰から下が細目になった1人の男が、^{べつこう}鼈甲縁の度の強い眼鏡をかけ、あご鬚を蓄えて、飄然と横浜港に降り立った。社会学を研究し、アメリカから10年ぶりに帰朝した小林^{かおる}郁である。

数日後の雨の日、東京朝日新聞社の記者が麻布三軒家町の後藤男爵邸後ろの小林宅を訪ねて来た。新聞記者が、

「夏目漱石の『吾輩は猫である』に出てくる美学者迷亭のモデルは先生だといううわさがありますが、本当ですか？」

と尋ねると、小林郁は巻煙草をすばすば吸いながら、

「さあ、知りませんなあ。夏目さんも死にましたね」

と、モデル問題は即答を避けた。そして、記者の質問に小林は哲人のごとく沈着にアメリカ生活について雄弁に語った。

「1911(明治44)年でした。広島高師(現・広島大学)を^や罷めてからシカゴ大学に社会学研究に行きました」

「ううん。丸10年だが、帰ってみると、ものが高いし、自働電話を掛けようたって白銅がなし、電車があの有様、もう少し調^{トレーニング}練されてもよかりそうだ」

「まだ帰ってよくわからんが、少くとも思想界は混乱期だと思っているですよ。過渡期ということは古く言われてるが、今日はそうでない混乱です。どう収まるかわからんですな」

「この間、花時に電車に乗ったら、職人でしょう。仮装して俗謡を唄って、合の手に"それ、民本主義は"なんて言いました」

「家の前を通る酒屋の小僧が、"20世紀の今日"などと叫んでましたが、要するに、外部的にはまだ抽象的に深みも自覚もない摸倣でしょう」

「私はお札博士のスタール氏の助手をしてました。私は博士に"日本の文明も立派なものでしょう"と行ったら、"こっちから渡ったものだ"というふうに笑ってました」

「電車罷^{ストライキ}業もシカゴで1昨年遭ったが、東京のように無警告でやりません。これは論ずるまでもないですな」

「米国のデモクラティックの1例を引くと、戦争中ハブという大洋服屋の番頭さんを一躍少将にして、被服廠長にしたこともあります。日本は少尉から^{ステップバイステップ}一歩又一歩でしょう。」

『吾輩は猫である』の迷亭のような警句や駄洒落は出なかったが、なかなか快弁を振った。翌日の5月2日(日)、「東京朝日新聞」の第5面に、

「猫」から抜けて丸十年 駄洒落も出ない 迷亭さんの正体
お得意の太神楽式煙管も廻さず 巻煙草スパスパと 快弁振ふ小林文学士

と 2 段見出しで帰朝報告の記者会見の様子が綴られ、「十年 或は老猫におちついたのか」と結ばれていた。

2. 小林郁の学生時代

元来、漱石の『吾輩は猫である』の主要なる人物、迷亭のモデルについては、漱石自身のもっている性格の一面であるとか、美学者であることから大学時代の友人大塚保治(後に帝国大学教授・美学)であるとか、夏目鏡子の叔父中根與吉(1896 年当時福岡在住)であるとか種々詮議されているが、鏡子が『漱石の思ひ出』24「『猫』の話」で述べているように、「自分のもつてある性格を、あのものぐさなむつつり屋の変人くしやみと、軽口屋の江戸っ子迷亭とに二つにわけて書いたものでありませう。 実際夏目にはさうした二面がありまして、冗談をいつたり軽口を言つたりすると際限のないところがありました。」

というのが、一番妥当と思われる。 漱石自身の軽口屋の江戸っ子的一面の基盤の上に、漱石周辺人物の中から地位・性格・事件・風貌などが活々と造型されたものと思われる。

先の「東京朝日新聞」によって、『吾輩は猫である』の迷亭に擬された小林郁とは、どのような人物であろうか。

小林郁は 1881(明治 14)年 8 月 29 日、東京市麻布区に父・小林謙一郎、母・シン(歌人。八田知紀の門下生)の長男として出生した。 次弟に次郎(1884 年 2 月 6 日生。永くニューヨークに在住)、3 弟に俊三(1888 年 6 月 3 日生。後に弁護士、最高裁判所判事)がいる。 1896 年 12 月 19 日、家督を相続。 1898 年 7 月、第一高等学校文科を卒業した。 同期に尾上八郎おのえ(柴舟、歌人)、沼波武夫ぬなみ(瓊音、俳人)らがいる。 1902 年 7 月、東京帝国大学文科大学哲学科を卒業。 大学院に入学。 社会学を専攻し、外山正一教授、建部遯吾教授らの指導を受けた。 漱石の愛媛県尋常中学校嘱託教員時代(1895 年 4 月～96 年 3 月)、第五高等学校教授時代(1896 年 4 月～1900 年 7 月)、ロンドン留学時代(1900 年 9 月～1903 年 1 月)に相当するので、漱石帰朝までは漱石・小林の間に直接学校における師弟関係は存在せず、2 人がいつどこでどのような接点で結びついているのか、未詳である。 その可能性を探ってみよう。

小林郁の東京帝国大学在学中の事跡として遺された資料はほとんどないが、一時キリスト教徒であったらしい資料がある。 比治山女子短期大学教授寺田芳徳氏の調査によると、『東京大学基督教青年会表・附解説』1868(明治元)年—1952 年(昭和 27)年(1957 年 12 月 14 日発行、発行者 東京大学基督教青年会 文京区駒込追分町 53、編集者 荒木亨、印刷者東京プリント印刷〈寺田芳徳氏所蔵〉)の年表に次のような記事がある。

1899(明治 32)年 12 月 27 日午後 6 時 30 分より、東京帝国大学寄宿舍内有志が、第 1 回「横文字」(注：どのような会かは不明。その後、「横文字」という表記はないので、何らかの誤りかもしれない)を開き、栗原基もと(宮城県出身。1901 年 7 月東京帝大英文科卒。後に広島高等師範学校教授、第三高等学校教授。英語)、深田康算やすかず(山形市生。1902 年 7 月東京帝大哲学科卒。後に京都帝大教授。美学)、渡辺(未詳)、小林(未詳)が演説をしているが、寺田氏によるとこの小林は小林郁か小林光茂か不明である。 しかし、後の小林郁の活動などを考えてみると、小林郁である可能性が非常に高い。

次に 1900 年 11 月 14 日午後 4 時より、東京大学基督教青年会水曜祈祷会が参会者 18 名で開かれ、司会の小林郁が「信仰と知識」と題して哲学的所感を 2、30 分述べたところ、三原新太郎が起って、祈祷会は 1 個人の心理的講義にあらざる旨を宣言した。 続いて米国に留学してドクトルの称号を得た客人某が 2、3 の所感を述べて祈祷会を終わるや、三原

は祈祷会が各人の気焔の吐き比べに過ぎない観があるとして、今後これに出席する意義はないと言ったという事件が起きている。その後、小林郁のキリスト教の軌跡は全く不明である。

この「信仰と知識」と題する哲学的所感がどういう内容のものであったかわからないが、心理的講義として批判されているところをみると、宗教的な信仰の問題というよりも、哲学的心理学的な側面が強かったと類推される。後半生、キリスト教徒としては生きなかつた彼は、結局、漱石と同じく門に入ることができず、門外に佇む人で終わった。

前述の栗原基は『東京大学基督教青年会表・附解説』にしばしば登場する人物で、基督教青年会の中心的存在として活躍、その後は教育者となって豊かな信仰で学生に多大の感化を与え、小原国芳(玉川学園長)、長田新(広島文理大学長)、石田英一郎(文化人類学東大教授)ら¹多くの弟子を輩出した。栗原は小林より1年早く1901年7月に当代英文学科を卒業して1903年4月に広島高等師範学校教授になっているので、おそらく栗原が翌年小林を広島高師に招いたのであろう。

同じく東大基督教青年会の深田康算は小林郁と同年の1902年7月哲学科を卒業し、ラファエル・フォン・ケーベル博士宅の2階に5年間も寄寓して、その薫陶を受けた。ケーベルは1893年6月10日帝国大学文科大学哲学担当教師になったので、夏目漱石も大学院でケーベルの美学の講義を聴いている(漱石『ケーベル先生』)。1914(大正3)年8月ケーベルが帰国する時、漱石は「ケーベル先生の告別」を東京朝日新聞に書いたが、深田康算のことに触れている。小林郁もケーベルの講義を聴いたはずであり、小林の大学院在学中(1902年9月～1904年3月)は、漱石の東京帝大講師期間(1903年4月～1907年3月)と約1年間重なり合うので、社会学専攻の大学院生小林が英文学講師の漱石の講義を聴いた可能性は十分に考えられる。漱石と小林との間にケーベルと深田が介在している可能性がある、と言っていいただろう。

3. 漱石と小林郁との接点

1903(明治36)年10月11日、漱石・小林間に初めて微かな接点が生じる。「十月十一日(日)晴(中略)馬車にて追分迄乗り夏目先生を訪ふ 文学士小林馨君来れり。」(『寺田寅彦全集』第18巻 岩波書店 1998年7月6日)

もし、この「小林馨」が「小林郁」と同一人物であるならば、漱石と小林郁の初めての接触であり、東大英文学担当講師の家を東大社会学専攻大学院生が訪問したことになる。それは偶然漱石宅で寺田と邂逅したものか、寺田寅彦の仲介によるものかわからない。五高・東大理科出身の寺田と、一高・東大文科出身の小林との接点もまた1つすっきりしない。最も明瞭な接点は、1904年7月20日付野間真綱宛漱石書簡の中に小林郁が登場した時である。

¹ 俣野大観先生卒業 彼云ふ 訪問は教師の家に限る かうして寐転んで話をして居ても小言を言はれないと 僕の家にて寐転ぶもの 曰く俣野大観 曰く野村伝四 四半転びをやるもの 曰く寺田寅彦 曰く小林郁 危座するもの曰く野間真綱 曰く野老山長角

1904年4月、小林郁は栗原基の招聘であろう、広島高等師範学校の教授となり、倫理学、社会学、哲学、独逸語などの講義をした。漱石が野間真綱(1878年1月25日～1945年9月3日)にこの書簡を出した時、野間は日比谷中学校教師をしながら、鹿児島島津男爵家(麻布区三河台町)の家庭教師をしていた。彼は1897年9月に第五高等学校予科1部(文科志望)に入学し、1900年7月に卒業しているから、五高では漱石に直接教えを受けた。同年9月、東京帝国大学文科大学英文学科に入学したが、その時、漱石はロンドンに留学した。漱石が帰朝し、東京帝大の英文学担当講師になったのは1903年4月であり、野間の卒業は同年7月であるから、野間は3、4ヶ月講義を受けたかも知れない。いずれにしても野間は漱石の直弟子であり、小林と野間は東大文科で専攻は異なるが、卒業が1年違いで、小林の大学院在学中を含めると、4、5年の接触期間が推定される。小林の大学院在学中(1902年9月～1904年3月)に漱石の東大講師期間(1903年4月～1907年3月)が1年間余り重なり合うので、英文学担当の講師と社会学専攻の大学院生との交流があったとするならば、野間真綱の介在も類推する必要があるだろう。

前記の書簡を読むと、俣野大観(『吾輩は猫である』の多々良三平のモデルといわれている俣野義郎。五高の教え子)を初め、野村伝四(当時東大英文科学生。後奈良県立奈良図書館長)、寺田寅彦、小林郁などが漱石宅(駒込千駄木町)で我が家のごとく、寝転んだり半転びしたりしており、威儀を正して危坐(正座)する者は野間真綱と野老山長角(寺田寅彦の友人。東大国史科学生)のみであったらしい。夏季休暇中なので、小林郁は広島から帰京し、教え子たちの出入りも頻繁であり、後の木曜会的な談論風発の雰囲気既に芽生えつつあったと思われる。

この夏6、7月ごろ、一匹の小猫が夏目家に迷い込んで来た。『吾輩は猫である』のモデルとなった猫である。漱石が高浜虚子の勧めで「山会」に提出するため『吾輩は猫である』を書き始めたのは、1904年11月中～下旬ごろと推定されている。夏から冬にかけて夏目家に出入りしていた者は、寺田寅彦、野間真綱、高浜虚子、橋口貢、野村伝四であり、やがてこれに坂本四方太、皆川正禧、中川芳太郎などを加えて文章会が開かれるが、小林郁は既に広島高等師範学校に赴任していたので、時間的空間的に迷亭としての役割は甚だ稀薄であったろう。

小林郁がなぜ迷亭のモデルの1人に擬されたか不明であるが、少なくとも漱石が『吾輩は猫である』を執筆中は小林は大部分広島滞在中にいて、休暇中しか東京にいない。このように接触の稀薄な小林が迷亭に擬されたのは実に不思議である。

さらに接触の軌跡をたどってみよう。

1910(明治43)年6月18日(土)、夏目漱石は胃潰瘍の疑いで長与胃腸病院(長与称吉院長。麹町区内幸町)に入院した。その入院中の7月28日(木)、夏休みで在京中の小林郁が長与病院に漱石を訪ねて来た。

- …それから小林郁がくる。…(中略)…
- 1軒置いて西の御婆さんも退院の様。訪問の若い女、洗顔所で洗濯をしてゐた付添の女に、今年中もつでせうかと聞いてゐる。御婆さんは胃がんの由然し歩行自由也。
- 小林がきて承はれば胃がんだとかいふ話でといふ。橋口もさう云ふ。

(1910年7月28日付漱石日記)

広島から帰省中の小林は漱石の入院を知り、早速見舞いに駆け付けた。小林は「承はれば胃がんだとかいふ話で」と言ったが、これは漱石のことではなくて「西の御婆さん」のことであろう。もし漱石が胃がんだと言われたのであれば、夜に銀座を散歩する気にはなれないだろう。それにその日胃の消化試験をしているので、まだ最終的な診断結果は出ていなかった。

同年7月31日(日)、漱石は長与胃腸病院を退院し、1ヶ月ぶりに牛込早稲田南町の自宅に帰った。長与病院から旅行の許可が出たので、8月6日(土)午前11時、新橋発神戸行列車で転地療養のため修善寺に向かった。三島で乗り換え、大仁に到着、人力車で菊屋旅館に落ち着いた。が、転地のかいもなく漱石の胃の状態は悪く、遂に8月24日(水)大吐血をして人事不省に陥った。各地に危篤の電報が打たれ、翌日には急を聞いた人々が陸続として見舞いに駆け付けた。8月28日(日)小林郁が修善寺に漱石を見舞ったのは、小林郁の3弟・俊三が「³兄のところに電報が来たのを当時中学生だった私は見ている。」と書いているので、その電報を見て駆け付けたのであろう。その夜は修善寺に泊まり、翌29日午前中に漱石の病室に入って見舞った。漱石の容態はやや持ち直し、安倍能成らが漱石と会話しているので小林も話をすることができたかも知れない。

1911年春ごろか、小林郁にアメリカ留学の話が来た。小林は留学を決意し、広島を去り上京した。

羽織を着る頃で、或は初春の頃ではなかつたかと思ふが、ある日の午後千駄木を訪問したら、一人見慣れぬ御客様があつた。紹介された所では、広島高等師範学校の教授で、小林郁と云ひ、社会学の学徒であつた。小林さんは既に先生とも旧知の間柄で、話は至極打とけて、佳境に入つて居た。何でもアメリカに留学するお別れに訪問されたとか。すると誰が云ひ出した事か、深川に散歩しようと云ふ事となり、無論私も参加した。(私が深川の地に足を踏み入れたのは、後にも先にも此の時丈であるから)。私はこの散歩を今でも大いに感謝して居る。深川と云ふと途中は電車である。本郷三丁目から乗つて、一、二度乗り換へて、永代橋を渡り、八幡様の前が終点だったから、そこで降り、それから奥の方に歩いたが、同行者は今の小林さんに先生と私、ほかに一兩人あつたらしく思はれるが、誰であつたか思ひ出されぬ。道を行くと奥に行くに従つて、町は段々さびしく汚なくなり、十町も行つたら田となつて仕舞つた。すると程遠からぬ所に疎林があつて、神社がのぞかれた。一行はそこに辿り着いて一拝した。元八幡宮であると云ふ事であつた。こゝに一憩して、道を南にとり、やがて海に見える所に来た。此处から何処に行かうかと云ふ事になつたが、東は田で、この方へ行けば帰路は遠くなるのだが、時は早四時過ぎであつたから実行不可能となつた。元の道を帰るのはいやだ。所が西の方はずつと竹の垣が結び回して、中は広々とした一区域になつて、吾々は之を養魚場と見た。而してこの養魚場の中に置いて四、五町向ふに州崎の遊郭が居然として聳えて居た。そこで一同は養魚場を抜けて、遊郭の中を通つて帰らうと云ふ事になり、誰が先頭だつたか知らないが、丁度近くにあつた小門を開けて中に這入り込み、物の十間も行つたかと思ふ頃、後から番人が声をかけて、外に出ると

云つて怒声を発した。すると「いや戸が開いたから通つても宜いと思つて、つい…」と誰かが弁解して番人の前を通り抜けると、先生も中にまぎれて、ウフフフ…と笑つて居られた。番人は一同を門外に追ひ出すと、大きな声で「あなた方の様な教育のある御方が…」と怒鳴った。而して吾々はその竹垣に添うて細径を伝ひつつ北行し、道々「あなた方の様な教育のある御方が…」を口々に、笑ひさぶめいて、町の方に出て、終点迄来て、薄暮電車に乗つて帰つたのであつた。

(野村伝四「散歩した事」『漱石全集』月報 第 16 号、1937 年 2 月 岩波書店)

この野村伝四の深川散歩がいつのことかわからないが、小林郁がアメリカ留学のお別れに訪問した時とあるので、1911 年のことであるが、初春の候であつたかどうか知らない。小林郁が漱石とは旧知の間柄で、話は至極打ちとけて佳境に入っていたことにより、2 人の仲が非常に親密であることがうかがえる。

1911 年 6 月 15 日(木)付の漱石日記によると、「○ 小林郁来、又短冊をかゝせられる」とあるが、その日は内田栄造(百閒)、小林修二郎、関清治(晴瀾)らも来て、漱石に揮毫を求めている。現在、小林郁の長男・久氏の遺族(世田谷区桜上水在住)宅には、次で紹介する漱石書簡の他に遺墨は残っていない。この日書いてもらった短冊はどうしたのであろうか。

岩波書店『漱石全集』「書簡集」の中に小林郁宛の書簡は 1 通も収録されていなかった。従つてここに紹介する小林郁宛漱石書簡は新版『漱石全集』第 23 卷「書簡 中」(1996 年 9 月 19 日)に初めて収録された。

先日ハ雨中わざわざの御訪問 何の風情も無之失礼致候 その節御申込の事一寸社へ相談致候処 月にいくらと極めての通信は到底できない様 さすれば大兄の方でも甚だご不安にて 折角書いたものが没書になるか掲載になるかさへ判然せず、よし掲載になつたとて其時限り一回の通信につき五円乃至十円位の報酬にしか^(ママ)ならず つまり割に合はぬ事と可相成候 大体の処は今迄の慣例できまるもの故 社の方でも夫より以上ハ何とも申さず 小生も如何とも致しがたくにつき 右あしからず御了承願候 先は右御報知迄 艸々 頓首
六月二十四日 夏目金之助
小林郁様

封筒の表は「^(ママ) 広島県広島高等師範学校 小林郁様」とあり、発信印は「44・6・24」で、受信印は「44・6・26」である。裏は「東京牛込早稲田南町七 夏目金之助 六月二十四日」とある。巻紙に毛筆で書かれたものである。

さて、1911 年 6 月は既にアメリカ留学が決定していたと思われ、6 月 15 日付漱石日記にもあるごとく、小林は東京にいて留学手続や挨拶廻りをしていたようであるが、下旬には一旦広島に帰任していたのであろう。書簡の内容であるが、アメリカ留学が決定した小林郁が毎月アメリカ便りのようなものを『東京朝日新聞』に発表したいので、その周旋を漱石に頼んだ模様である。漱石は新聞社に相談してみたが、月にいくらと決めての掲載はできないという返事だったようだ。1 回限りの通信は 5 円乃至 10 円の報酬にしかならず、割に合わないことになる」と述べている。結局、小林郁が朝日新聞にアメリカ便り

を書き送っても掲載されなかったようであり、遺族も掲載されたという伝聞は伝えられていない。

偕小生の知人にて社会学専攻の文学士小林郁と申す人 此度広嶋高等師範教授を辞し 米国シカゴ大学へ研究の為め参る事になりました処 本人事昨年未腸チフスに罹り 其後回復は致したれど全然平生の健康と申す程に行かず 従つて長途の航海風土の変化につき 多少の心配を抱きて此際大兄に一応診察を願ひ 猶養生法等篤と承はり置度故紹介をしてくれとの依頼あり、御多忙中御迷惑とは存じますが、もし御暇もあらばどうぞ御会ひ下さい、又御差支の折は時日を期し御呼寄せ下さい、甚だ勝手な事を申上て済みませんが宜敷願ひます

七月二十八日

夏目金之助

宮本様

宮本^{はじめ}叔 医学博士(1867 ~ 1919)は東大助教授・駒込病院長で、余技として俳句を正岡子規に学び、1910年8月の修善寺の大患の時、漱石が世話になった医師である。後、1916年12月の漱石臨終の時も立ち合っている。この最も信頼している宮本叔に小林郁の診察を依頼したのだから、小林もまた漱石から大変信頼されていたことがわかる。

宮本叔の診察が実施されたかどうか確認はしていない。また小林郁の腸チフスについてもどういう症状であったかわからない。幸い後遺症はなかったのであろうか、1911年9月に広島高等師範学校を退職し、アメリカに渡り、10月シカゴ大学に入学し、社会学を専攻した。

小林郁の滞米は満9年に及ぼうとするほど長期にわたったが、その間のことは全く不明であり、未調査である。

郁の弟・⁴俊三によると、俊三が一高2年級の末か3年級のころシカゴの郁から分厚い手紙が着いて、その中に漱石宛の長い書面が入っていたそうだ。それを母から漱石に届けるように麻布の自宅から指図があった。その当時文壇を風靡していた夏目漱石宅へ書面を届けるということは、青年ならば誰でも1種の興奮を覚えるだろう。その書面を俊三は早稲田南町の漱石山房へ届けに行った。女中に用件を伝え、書面を差し出すと、しばらくして漱石夫人の鏡子が出て来て、「小林郁さんの弟さんですか」と聞いたので、「そうです」と答えると、鏡子は一旦引き込んだが、やがて漱石が玄関に出て来た。「どうもご苦労様。あなたは何科にいますか。いい体格をしていますね」と言ったそうである。当時、俊三は柔道とボートで鍛えた筋肉隆々たる体躯であったという。小林郁はシカゴ大学に1919年3月までおり、同年9月さらにイリノイ大学に入学、社会学を専攻し、1920年4月帰朝した。

帰朝後、小林郁は⁵拓殖大学教授に任ぜられ、拓殖大学主事、予科長、図書館長、専門部長、評議員として学内に重きをなした。経書購読、社会学、社会政策、独逸語、経済学史を講じ、拓殖大学が大学令により専門学校から大学に昇格した時(1922(大正11)年6月)、主事(現在の事務局長)として尽力した。講師として慶応義塾大学、中央大学、日本大学、青山学院大学などにおいて社会学を講義した。彼は晩婚で1924年6月17日、数年44歳で森田むめ(梅子)と結婚した。長男・久(一高・東大法学部卒。山久株式会社常務取締役)、

次男・和三(一高・東大法学部卒。新日鉄)に恵まれたが、専門部長の時、1933(昭和8)年5月22日午後10時30分、東京市小石川区表町109番地において、数え年53歳で急逝した。

4. 小林郁の人となり

小林郁について、遺された僅かばかりの資料によってその軌跡をたどって来たが、小林郁はどんな性格の人物だったのであろうか。漱石が『吾輩は猫である』において迷亭のキャラクターを造型するさい、小林郁のイメージが彼の脳裏をかすめたのであろうか。

そこで、彼の人となりを見てみよう。小林の拓殖大学の教え子で、その助手を務め、後に母校拓殖大学の講師、助教授、教授と進み、その間、学生主事、図書館長、研究所長、専務理事、商学部長、短大学長、学長、総長などを務めた豊田悌助氏(弁護士)の著書『凡人の生き方』(鳳書房、1977年1月)や直接伺った話その他の資料によって、彼の人間像を描いてみる。

小林郁はアメリカ帰りなので英語はもちろん、ドイツ語、フランス語にも堪能であった。社会学の講義なのに英・独・仏語が変幻自在に飛び出して、学生たちを面食らわせた。一方、漢文も達者で、多くの外国学者の説を博引旁証して該博ぶりを発揮した。論理は明解であったという。主な著書に『論理学教科書』、『コムト』、『社会心理学』(博文館1909年)、『社会学概論』(巖松堂書店1923年)があるが、特に『社会学概論』は当時社会学を学ぶ者にとっての必読の書であった。また、授業で用いていた原書には、Wolfgang Hellerの"Theoretische Volks-Wirtschaftslehre"やHenry Clayの"Economics"などがあつた。

小林の人となりは清廉潔白で、明朗闊達、天真爛漫、子供のように邪気がなく、学生から慈父のように敬慕された。漱石に倣ったのであろうか、毎週木曜の夜を学生の面会日と定め、学問の指導、就職の世話までよくやった。

例えば⁶ こんな話がある。ある時、某会社に卒業生の就職の世話をした。会社側で「その学生は英語ができますか」と質問した。小林は「僕の英語をテストしてみてください。僕が保証するのですから、大丈夫ですよ」と言って採用してもらったというほど学生思いの教授であった、と豊田悌助氏は書いている。

アメリカ留学中は1日に1冊読破したという伝説があるほど、驚くべき読書量で、博覧剛毅、該博な知識をもって拓殖大学に学府らしい雰囲気をもたらした功労者となった。

度の強い眼鏡の奥にすわったまなこ。薄くなった頭髪。あご鬚を蓄え、わずかばかりの鼻髭がぼそぼそと生えていた。脚の運びは何となく心もとなく、ちょっと突っ掛ければ前方に転びそうな足どり。ややかん高い一風変わった声の持ち主で、身のこなしようといい、講義の仕方といい、どこか一抹のユーモアをたたえた風貌であった。そこが『吾輩は猫である』の迷亭に議せられた由縁かも知れない。

大柄な体格でがっちりしていた割に、小心であったエピソードがいくつか残っている。その1は地震を大変恐れていたことである。⁷ 佐藤勘助氏(拓殖大学教授)によると、ある日、テニスコートの向こう側の掘立小屋のような校舎で講義をしていた時にグラグラッと地震が来た。小林は震え出して冷や汗をかき、講義をやめて引き揚げてしまったそうだ。関東大震災の恐怖がよみがえったのかも知れないが、学生たちはその異常な驚き方にかえって驚いたようである。

その2は1929(⁸昭和4)年夏、恒例の朝鮮・満洲・北支視察旅行の時のことである。引

率は小林郁、助手の豊田悌助氏は世話係であった。出発前のある日、小林は杉本千丈に「杉本君、僕はチブスの予防注射と種痘はしたが、赤痢はまだだ。君、満洲はコレラは大丈夫かね」と聞いたので、杉本は「用意周到なものだなあ」と感心した。学生たちは伝染病のことなど大して気かけず、正露丸でも持って行けばよかろうと言っていたそう。京城(現・ソウル)、平壤(現・ピョンヤン)、安東(現・丹東)、奉天(現・瀋陽)、長春を経て、^{ハルビン}哈爾濱に着いた。旅館に入って、浴衣に着替えると、すぐ食事になった。ロシア風漬物やニンニク入りの大きなソーセージを食べながら、学生たちが小林を見ると浴衣を裏返しに着ている。「先生、浴衣が裏返しです」と学生が言うと、その時小林少しも騒がず、「君、浴衣の裏は人の肌が付くところだろう。皮膚病がうつるかもしれないから、僕は裏返しに着ているのだ。この方が衛生的だからね」と至極真面目に泰然自若と答えたので、学生たちは「へえ」と言ったきり二の句がつけなかった。洗濯がしてあり、日本人経営の旅館であっても、外地は非衛生的で安心できないと小林は考えていたのであろう。

哈爾濱から南下し、^{トウゴウズ}湯崗子の河原の温泉につかり、大連の宿舎に着いて、学生たちは皆外出してしまった。杉本だけが何科の都合で外出が遅れているところに小林が現れて、「杉本君、どこかアイスクリームを食べるところはないかね」と案内して欲しい口ぶりで言った。2人で街へ出てしばらく歩いているうちに、奉天や哈爾濱で入ったことのあるヴィクトリアという店があった。いちご、ヴァニラ、宇治茶の3色盛り合わせのアイスクリームに、小林は御満悦の体であった。夕方、小林は学生一同の席で、「僕は今日、禁を1つ破ったよ。この旅行でアイスクリームは食べないことにしていたが、とうとう食べた。大連なら大丈夫だよ。日本の租借地だから日本と同じことだよ」と笑いながら白状した。学生たちはまたも「へえ」と言って、感じ入って、「感想はどうでしたか」と笑う者など賑やかなこととなった。

豊田悌助氏の話によると、この満鮮旅行の時、小林は二等車(今のグリーン車)、豊田氏は三等車に乗っていたが、或る時、小林が三等車の豊田氏のところに来て、「豊田君、僕の前に座っている男はどうも怪しい。スパイのようだ。君、ちょっと見て来てくれないか」と言った。豊田氏が行って見たが、別に変ったこともない。やがて小林は「どうもスパイではないようだ」と言って、やっと安心したということだ。

拓大名物の「オス」という挨拶がまだそれほどすさまじくなかった頃、1929年の満鮮旅行で汽車が発車する時、向こうにいる仲間に「汽車が出るから、早く来い」と言うところを「オス、オス」と言っていた。まだ何でも「オス、オス」と言う元気のいいオスではなかったが、小林も冗談に「オス、オス」と言って、茶目っ気を出していたそうである。

小林はまた弁論部長を務め、松江で「民族の発展」という演題で講演をしたことがあった。彼の話しぶりは潔癖なものであったが、ある聴者が「冗長！」と野次った。彼はそれを聞くと、講演をやめて、さっさと縁談を降りてしまった。

小林はまた刀剣の趣味を持っていた。小林の急逝後、夫人は蔵書全部を拓殖大学図書館に寄贈し、小林文庫と名付けられた。1968年12月20日、「小林文庫分類目録」が拓殖大学図書館から作成されたが、その目録の中に刀剣関係の書籍が13冊入っている。刀剣も近江守助直など20振ほど所持していた。津田越前守助広を手に入れて得意だったが、ある時鑑定をしてもらったところ贋作であることがわかり、大変くやしがあった。豊田悌助氏の親戚の人が助広を所持していると聞いて早速見せてもらい、熱心に譲渡を交渉したが、

遂に応じてもらえず、非常に残念がっていたようだ。

ある時、教え子が「刃文は油を塗って作るのですか」と聞いたので、小林は「全く日本精神を知らないやつだ」と言って立腹した。

豊田悌助氏の実家は栃木県二宮町であるが、ある時、小林郁を招いて松茸狩りに行った。小林は大変喜んで、「豊田君のところの松茸は自然で、これこそ本当の松茸だ。広島の松茸は業者が営業用に植えたもので、だめだった。」と言って、無邪気に相好を崩した。

彼はゆで卵は3分間で作らなければならないという持論を持っていた。学生にゆで玉子を作らせた時、持って来たので、「何分間ゆでて来たか」と聞くと、学生は「適当にゆでて来ました」と答えたので、「適当ではだめじゃないか。3分間でなくてはいけない。」と叱責した。

運動神経はある方ではなく、自転車にも乗れなかった。「テニスは練習すれば上手になるはずだ」と言っていたが、練習していた形跡はなかった。

酒は少々たしなむ程度で、すぐ赤くなった。歌は下手で、宴会では歌わされるのを嫌って「芸者を呼べ」とよく言った。

小林郁はまた潔癖な男であった。出張に行って、たまたま領収書のないものがあり、会計課長に必ず領収書を出すように言われると、旅費全額を返済してしまった。課長は困惑して、学監の中村進午法学博士に泣きつき、仲裁に入ってもらって和解した。

小林は平生「日本の女はだめだ」とよく言っていた。ある時、学生が「先生の奥さんは日本人じゃないのですか」と聞いた。彼は悠然として、「日本人だよ。しかし、僕の家内はスペシャルだ」と言って、笑っていた。梅子夫人(戸籍名は「むめ」)は郁の急逝後、2児の養育に専念し、2児ともに一高・東大を卒業させた賢母であった。戦中・戦後の困難期に戦災で折角新築した家を焼失し、その苦労は容易ではなかったと推察されるが、子息成人後は、梅香と号して活花と茶道の師匠となり、池坊短期大学で教えていた。郁の蔵書を全部拓殖大学に寄贈したことによっても、賢夫人であったことがうかがわれる。夫人の実家森田家は医家であった。また、小林郁は子煩悩で、子息たちを大変かわいがっていた。

長男を肩車して観兵式を見物に行った時のことをまざまざと記憶していると、豊田氏は言う。時に過保護と思われるくらい子どもを慈愛深く養育した。冬は眼鏡にマスクに耳当てまで付けさせて、風邪をひかないように長男久を溺愛したが、その意が天に通じたのか、病弱だった久は父の死後、かえって丈夫になった。

5. 小林郁は迷亭になりえたか

一体、小林郁が『吾輩は猫である』の迷亭のモデルと言われ始めたのは、いつのことだろう。その由来はいまだわからない。私が初めて小林郁が迷亭のモデルの1人であることを知ったのは、小林俊三の「向陵何ぞ三年の記(4)——明治四十年九月頃からの話——」(『向陵』第17巻第1号、1975年4月)の中の次の文章を読んだからである。

この兄について漱石関係の奇妙な話がある。ある時漱石が『猫』の「迷亭」について門下の誰かに小林郁の一面に似たところがあると話したらしい。それが広がって迷亭のモデルは小林郁ということに門下間ではなっていたらしい。

しかし、漱石の門下生が「迷亭のモデルは小林郁である」と書いたものを私は知らないし、今まで述べてきた通り、2人が接触したのは漱石が東大に着任した1903年4月から小林が広島高師に赴任する1904年4月までの1年間に過ぎず、それ以外には長期休暇中に上京した時だけであるから、漱石の「迷亭」造型に小林が大きな影響を与えたとは考えにくい。

後年(多分大正9年末頃)シカゴから帰国したとき朝日新聞がたしか「迷亭君帰る」という記事を社会面にでかでかとし、こういうこと生真面目な小心の兄は迷惑したらしい。しかし兄には迷亭の一面、例えば彼が勝手にそばやでそばを注文し苦沙弥家に届けさせ、迷亭が先生と話している間にそばやが遅くなりましたといって届けて来た、苦沙弥夫人がびっくりしうちでは頼みませんよと押問答しているうち、迷亭が「ああそれは私が頼んだのです、先生ちょっと失礼します」といってそのそばを先生の室の隅でばくついてしまう場面がある。兄は親しい信頼する人に対してはこんな振舞をしかねない。しかし本質は生まじめな人物で、迷亭の機知縦横の饒舌などおよそ似合わないと思う。

(小林俊三『向陵何ぞ三年の記(4)』)

小林郁には迷亭の機知縦横の饒舌は似合わないという3弟俊三の証言は重要である。今まで述べてきた小林の種々のエピソードは漱石の歿後、つまり小林がアメリカから帰朝した後のものが大部分であり、漱石自身の知らないことである。それらが『吾輩は猫である』に活かされていることはない。しかし、漱石門下生の間に小林郁は迷亭のモデルであるという噂があったという。弟・小林俊三は未だ次のような話を伝えている。

後年今の京橋明治屋の建物のところの上層に少し大きな西洋料理店があった。岩元禎先生逝去後一高卒業生の教え子の会がそこで催された。安倍能成さんが居られたので、「私は小林郁という者の弟です」と自己紹介したら、安倍さんは言下にああ小林郁さんなら古い夏目門下だ。迷亭のモデルの一面があると先生から聞いたことがあると言われた。

(小林俊三『向陵何ぞ三年の記(4)』)

漱石自身が小林を「迷亭のモデルの一面がある」と言ったとするならば、その「一面」とは何を指すのだろうか。

そもそも迷亭は「好加減な事を吹き散らして人を擔ぐのを唯一の樂にして居る男」(1)で、「心配、遠慮、気兼、苦勞、を生れる時どこかへ振り落した男」(3)である。「アンドレア、デル、サルト」の写生論(1)で煙にまいたり、「トチメンボー」という料理(2)を注文したり、金田夫人に牧山男爵(3)といういもしない伯父の名をかたって權威迎合主義者の鼻を明かす。そういう人を擔ぐ趣味を小林郁がもっていたかどうか知らない。小林も饒舌だが、彼のため周囲が席捲され、翻弄され、攪乱されるほど、積極的、攻撃的ではない。

第1章から第6章あたりまでの迷亭は開放的、楽天的な滑稽家で、カンカン照りの屋根瓦で目玉焼きができるか実験してみたり(6)、苦沙弥の家を訪問する際、勝手に蕎麦を注文して、苦沙弥夫妻の前で蕎麦の味を解する通人の食べ方を披露する(6)。小林にそういう奇行があったか、具体的なことは知らないが、前記の佐藤勘助氏は「⁹小林郁先生も変

わった先生だったね」と述懐しているのです。奇行も多かったであろうことは推測される。

第 11 章は第 10 章を書き上げた段階で終章にする予定だったらしく、大団円で苦沙弥・迷亭・独仙・寒月・東風ら太平の逸民たちがオール・キャストで総出演する。傍若無人に駄弁を弄し、才気煥発で快活な滑稽家だった迷亭は苦沙弥を揶揄し、冷笑する立場であったのが、第 10 章では苦沙弥と迷亭の差異がきわめて微少になってくる。それだけ楽天性が影を潜め、現代文明に対してペシミスティックで、苦沙弥の側に接近したことになる。

迷亭の結婚不可能説と苦沙弥の「タマス・ナッシ」の女性攻撃は非常に近い関係にあり、ある時期の小林郁を髣髴させていないか。常日頃小林は日本の女性を非難していたというし、数え年 44 歳まで独身だったことを考慮すると、若いころ、女性蔑視、結婚不信の心情を持っていたかも知れない。

畢竟、小林郁は漱石の『吾輩は猫である』の迷亭のモデルとしてのイメージは稀薄であり、『猫』執筆記のキャラクター造型には役立っていないと思われる。しかし、小林の天真爛漫で無邪気な稚気は迷亭の一面と共通するところがあったのだろう。漱石門下生の間からその声が挙がったとしても不思議はない。漱石もその一面を愛でて、迷亭らしさを肯定したかも知れない。しかし、それはあくまで暗合であったというのが真相ではなからうか。

-
- *1 菊沢喜美子著『父の思い出』（1969 年刊）による。
 - *2 俣野義郎(1874 ～ 1935)のこと。俣野は久留米生。中学明善校、五高、東大法卒。漱石の教え子。『吾輩は猫である』の多々良三平のモデル。詳しくは拙著『夏目漱石と菅虎雄』（教育出版センター、1983 年 12 月刊）、『喪章を着けた千円札の漱石』（笠間書院、2003 年刊）の第 7 章「『吾輩は猫である』中の久留米の住人・多々良三平 一崎人・俣野義郎のこと」を参照のこと。
 - *3 小林俊三。東京生。麻布中、一高、東大法卒。弁護士。1951 年 10 月最高裁判所判事。旧制第一高等学校同窓会の機関誌『向陵』第 17 巻第 1 号(1975 年 4 月)に「向陵何ぞ三年の記(4) 一明治四十年九月頃からの話」を掲載。その中に「夏目漱石、新渡戸稲造、岩元禎、その他の諸先生」という 1 項があり、漱石と兄郁との交渉が描かれている。
 - *4 前掲「向陵何ぞ三年の記(4)」
 - *5 豊田悌助『凡人の生き方』（鳳書房、1977 年 1 月 15 日）
 - *6 1900(明治 33)年、桂太郎が台湾開拓のための人材育成をする教育機関として「台湾協会学校」を設立。新渡戸稲造が学監(現在の学長に相当)を務めた。翌年、小石川区茗荷谷(=現在地)に移転。1904(明治 37)年、「台湾協会専門学校」と改称。1907(明治 40)年、「東洋協会専門学校」と改称。1918(大正 7)年、「拓殖大学」と改称。(拓殖とは「未開の土地を開拓し、そこに移り住むこと」の意)。
 - *7 『拓殖大学七十年外史』（1970 年 11 月 3 日）「昭和座談会」
 - *8 前掲『拓殖大学七十年外史』杉本千丈「小林郁先生への回想」

*9 *7に同じ。

(文責 山口範子)

※ 初出：『福岡女学院短期大学紀要』「人文科学編」第22号（1986年2月28日）